

現存在としての国家と実存的思考

山下 太郎

(1) ヤスパースの国家観

ヤスパースは『哲学』の第Ⅱ部第11章「客体性の諸形態」で国家の問題を論じている。彼は主体としての精神が、客体性として持つ精神領域 (Geistessphären) を代表する力として国家を挙げ、次のように言う (S. 350f.)。

時間内における現存在は人間の社会という形態としてある。人間の意志は時間内における現存在への配慮から発して、現存在を保護し生活圏や生活可能性を拡大する諸秩序を求める。その保証や可能性、拘束や自由がなんであれ、あらゆる現存在の配慮における究極の主権的法廷が国家である。国家はそれを通じて私が人類の現実の運命に参与する客体性である。国家の実存的意義は、ほかの人々が皆直接間接に依存するものの形成に共働するために、我々が現実を承認しこれを自己の責任として、共に引受けることにある (S. 351)。

現存在においては、人間は支配しようと欲する。この支配意志 (Herrschaftswille) は自己自身の断念であるが、これは避けられぬものであり、支配意欲がないと、人間の現存在は万人の万人に対する現存在闘争の無政府状態 (die Anarchie des Daseinskampfes aller gegen alle) に陥ってしまう (S. 364)。

ヤスパースはここで所有権の問題を論じ、社会主義者の意図や、福祉国家の理想の難しさも取上げ、現存在の客体的生存形態としての国家の限界を指摘するに至る。

(2) 現存在国家および国際政治の限界

ヤスパースは国家の限界を闘争におく。闘争 (Kampf) は限界状況の一つとして、彼が『哲学』の中で挙げたものである。彼によれば社会は国家として存在するし、そうしたものとして闘争の中に立つ。即ち他の国々と闘争する国家として、かつ自らの内で決定を下す意志の形成を巡りそれ自身と闘う国家として存在する (S. 371)。

[第9回大会シンポジウム要旨]

ヤスパースが現代国家ないし国際情勢について、その闘争及び戦争 (Krieg) の危険を深刻に警告しているものの一つは、言うまでもなくその著『原子爆弾と人間の将来』(1958) であるが、その中ではヤスパースは人間の暴力 (権力、Gewalt) をも限界状況に加えている。暴力は人間的現存在から排除されることの出来ぬものである。人間にとっては暴力の秩序 (Ordnung der Gewalt) だけが肝腎なのである。警察の行為は、暴力によって暴力を防ぐための最少限の暴力である。国家秩序は犯罪者によってだけでなく、国家相互間の暴力によっても内乱によっても破られる (S. 58)。

戦争は諸国家間の物理的な暴力であり、現代の危機は全体主義と結びついた原爆の脅威にある。ヤスパースは危機を克服する道を超政治的なもの (das Überpolitische) に期待する (S. 253f.) が、それは人間理性に基づく内的変革によるしかないとする。

(3) 内的飛躍の道としての実存的思考

こうした危機を克服する究極の道を、ヤスパースは高次の実存の自覚に置く。彼は後期の主著『真理について』(1947) の中で、実存的思考 (existentielles Denken) の意義を特に強調している。彼の説く自己としての包括者の様相の中で、現存在的な思考は心理的社会的な実践の領域に関係し、意識一般的な思考は科学的な正当性の領域に、また精神的思考は精神的現実性として、特に国家や法律の世界に関係する。ひとり実存的思考のみが、世界を超えた超越者に関わりを持つ。

実存的思考は、代替しえない歴史的に具体的なものを、普遍的なものを媒介として思考する (S. 355) 態度であり、歴史の深淵の内に魂の救済 (das Heil der Seele) に関する決断を見出そうとする (S. 356) 真剣さである。この主体的内面的思考に支えられて初めて暴力は愛の力に転換し、危機を克服する道も開かれると彼は説く。この思想は現代もなお、その重要さを失わない。

(静岡大学名誉教授・現日本大学講師)